

昭和快人録

知られざる戦史

戸川幸夫

昭和39年10月10日 初版発行

昭和快人録

¥ 280

知られざる戦史

著 者	戸 川 幸 夫
発行者	秋 田 貞 夫
印刷所	三報社印刷株式会社

発 行 所 株式 秋 田 書 店
 会社

東京都千代田区神田三崎町2-21
振替東京 99353・電話 (261) 5151~5

もし、落丁乱丁がありましたら、本社でお取り替えいたします。

昭和快人録

—知られざる戦史—

戸川幸夫

秋田書店

目次

志士、セレベスに死す〈近藤三郎〉	五
考古学者の一喝〈米村喜男衛〉	二七
インドネシアに命を賭けた男〈吉住留五郎〉	六二
東条と闘った七人の侍〈吉岡文六ほか〉	九
バリ島の碑〈三浦襄〉	一三七
日本捕虜部隊進軍〈佐藤国夫ほか〉	一七五
あとがき	二二〇

カバー装画 富賀正俊
本文カット 加藤たかし



志士、セレベスに死す

—近藤三郎—

オランダ軍の拷問に堪え、インドネシア独立に命を絶った男！

私が近藤三郎と最初に会ったのは、たしか海軍報道班員宿舎の食堂でだったと記憶している。

だがそれが何時のことだったか、どうしてだったか、いま思い出そうとしてもはっきりしない。でも会った所が報道班員宿舎だったことには間違いないようだから、きっと昭和十七年の五月か六月のことだろうと思う。

この宿舎はセレベス島マカッサル市の中心部にあった。大きな街路樹の繁る美しい大通りに面した、この街では高級な部類に属する住宅だった。もとはオランダ航空会社の社宅だったということで、芝生の前庭には四坪ほどの池があり、それを見下すようにバルコニーが突き出ていた。玄関はコンクリートの階段をのぼったところにあり、玄関のわきに、よく稔るバナナと、まっ赤な大輪の花をつけるクンバ

ンスパトウの樹があつて、玄関から入ってロビーを通り、食堂を抜けた裏庭には香りの高い白い花がいっぱいにつくチンパーカの樹があつた。

その宿舎にはマカッサル駐屯の海軍第二十三根拠地隊づきの報道班員たちがいた。朝日、毎日、読売それに同盟通信の記者とカメラマンたちで、私もその中の一人であつた。裏庭からは隣の家にも、くぐり戸を通してゆけた。そこには日映のニュースカメラマンたちがいた。

軍需部からもらつてきた蚊とり線香を焚き、いつものように夕食のあとのテーブルで、ランプをやっている、近藤は私のうしろに立った。

知らない者に手のうちを見られるということは——殊にオイチョカブの場合——嫌だったから、私は邪慳に彼を見上げた。

「何だい、君は？」

すると彼はにやりと笑つた。背は高くないが、が



っしりとした体格で、肉づきがよく、色が白かった。眼が大きくて、澄んでよく光っている。眉が濃く、鼻下にはチャップリン髭^{ひげ}を生やしていた。なんとなくユーモラスな、それでいてうっかり笑えないような雰囲気^{ふんいき}を彼はもっていた。

「おう、近藤君」

と、私の向い席で、親番をやっていた読売の佐井が声をかけた。

「君は、初めてだったかな」

そういつて彼は近藤を私に紹介した。

私がマカッサル市に入ったのは、皆よりも二カ月ほど早かった。マカッサルが陸戦隊に占領されたばかりの時で、わが艦載機の爆撃や艦砲射撃によって崩れ落ち、焼け焦げた建物が、ところどころにあった。広場には日本落下傘部隊を防ぐために竹槍が、空に向けて一面にうえてあり、海岸線にはトーチカ^{うちか}がならび、有刺鉄線^{うちか}が海の中を縦横に走っていた。

私はたった一人で、バスの水も出しっ放しにして客が逃げ去ったホテルに入って三日ほどを過した。

それからジャワへ行った。クリスマス島作戦を終えて、再びマカッサルに戻ってきた時は既に街は整頓され、あとから来た各社の記者たちによって報道班員宿舎が設営されていた。

だから朝日の伊藤や読売の佐井たちは近藤と前から知り合っていたらしい。マカッサルへの赴任ふにんの途中で知り合ったものか、この土地へ来て知り合ったものかわからないが、かなり親しげな様子だった。

「あなたのことは、小林から聞きましたよ」と近藤はいった。

「小林？」

「ハジウマル・ファイサル。小林哲夫ですよ」

そういわれても、私にはすぐには見当がつかなかった。

「王ラジャの招宴で一緒だったとか……」

「ああ、あの人が……あの人、日本人ですか？」

「日本人ですよ」

近藤は鶏のような声を出して笑った。私には見当がついた。一週間ほど前だったが、私はマカッサル近郊の王侯の宴会に呼ばれた。宴はなかなか盛大なものだったが、言葉のわからない私には殆どチンプンカンプンで、たらふく詰めこめるしか能がなかった。

机はきを挟んだ私の前に大きな肥満した男が腰をかけた。彼は駱駝らくだに乗ってやってきたアラビアの隊商のような服装をしていた。白い頭巾ずきんをかぶって鼻髭あごひげと顎髭あごひげとを黒々と生やし、魔法使いのようにも思えた。彼は鶏のももを手で引き裂いてはむしゃぶりついていた。彼は私たちに一言も話しかけてこなかったし、陽灼ひやけした皮膚の色から私は、彼が日本人だとは思わなかった。こちらからも喋しゃべらなかった。

食事の途中で、私は鶏の足を床に落した。私はすぐに拾って、埃を払ってしゃぶりついた。

「あ……」

愕いた様子で隣にいたインドの婦人が声を出した。そのとき、前の男がにやりと笑った。笑っても眼が鋭い。私も笑い返した。ただそれだけのことがある。その男がハジ小林だったのだ。

私は、だいぶ捲き上げられていたので、近藤が現われたのを機に席を立て、パルコニーに出た。

夕闇が這いよって、マカツサルが一番うつくしい頃だった。近藤と私とは椅子を並べて、通りに向って語り合った。

「小林がね、こんど来た報道班員はいままでの連中と違って少し変ってる、といっていたが、あんたのことだったんですね」

彼はすけすけといった。

「変ってるって……?」

ははあ、埃のついた鶏を食ったからかな、と私は思った。私は部屋に戻り、山羊の乳の壺を二つもつてきて、一本を彼に渡した。

「牛乳じゃありませんね」

一口飲んで彼はいった。

「そう、山羊」

「どうして山羊の乳を？」

山羊の乳が私のところへ届くには理由があった。まだ皆が来ない頃、私は漸く店びらきをした華僑街にいつて昼飯を食っていた。

すると、店の主人が私の傍にやってきて、古ぼけた腕時計を示して、買ってもらえないか、という意味のことをいった。要らない、と答えた。

「アイヤア……」

主人は頭をふりふり戻って、部屋の隅でスープだけを飲んでいたインドネシアの青年に時計を返した。何か事情がありそうだった。そこで私は、もう

一度主人を呼んで理由を聞いた。すると主人はいった。

「彼が売りたいがってるヨ。戦争！ 彼、故郷に帰れない。お金ないネ」

青年はふり返った私に弱々しく微笑した。青年を呼んで事情を聞いてみると、彼はオランダ訛りの強い英語で、「自分はミナハサ人でメナドで小学校の教員をしているが、妹の結婚式でここへ来ている間に戦争になり帰れなくなって困っているのだ」といった。スープだけの昼飯を摂っているところからみてもたしかに困窮している様子だった。

「時計は要らないけど……」

そういつて私は五円の軍票を彼に与えた。私はそれなり、自分のしたささやかな善行については忘れていたのだが、どうして私のことを捜しあてたのか、（或は海軍報道班員という腕章が目印になったのか）二、三日すると彼は毎朝、山羊の乳を私のと

ころに届けるようになった。

「それを売ればそれだけ君の収入になるんだから、

そうするがいい」

と私は彼にいった。そのとき彼は、

「この山羊の乳は私の妹一家が健康のために自家用として飼っているの、売るためのものでないからいいのだ。山羊の世話は、いま私がしていて、私のもらい分からあなたのところに届けているのですから……」

と彼は聞かなかった。彼の名はミスランといった。

だが私は面倒くさいので、山羊の乳に関する因縁話は近藤には喋らなかった。

ここで、私は近藤三郎と彼の周囲の人々について語っておく必要を感じる。近藤は愛知県はづ幡豆郡の出身で、昭和十年、二十二歳のときに一商社の社員としてジャワに渡った。その頃の彼は、やはり会社での出世を願う平凡なサラリーマンに過ぎなかった

が、在任中にジャカルタ（バタビア）で日本語並にマレー語の新聞『東印度日報』を発行していた久保辰二を知った。それ以来、彼の考えは変わった。オランダの支配下に喘いでいるインドネシア人のことが解ってくるにつれ、激情家の彼はじっとしていられなくなった。彼はそこで商社を辞めて、久保の下で東印度日報の記者になった。そのとき彼の同僚に吉住留五郎という記者がいた。

「インドネシアはこのままでよいのか。インドネシアが持つ富はインドネシア人のものでなければならぬ。東洋の富は、東洋人のものでなければならぬ。東亜の盟主と自負する日本は、インドネシアを援けて、インドネシアの独立を計り、オランダの支配から解放すべきではないか」

若い二人の情熱と意見は一致した。ひそかにインドネシア独立を計る志士たちと交わりだしたのであった。

戦雲が慌しい雲ゆきをみせはじめの頃には、近藤たちは海軍の情報機関である花機関（軍令部直屬・花田行武少将）と結びついていた。

久保と近藤がインドネシア情報を報告のため帰国している間に、日本は太平洋戦争に突入した。

間諜としてジャワに潜入していた吉住は逮捕された。しかし彼は頑として口を開かなかった。そのためにオランダ軍は、単なる一敵性国民として、彼を濠州に拉致した。交換船で日本に送還された吉住は一息いれる間もなく海軍命令で、百名ほどの情報部員を集め、吉住隊を編成、マカッサルに乗り込んだ。結局、彼は終戦後、現地に残ってインドネシア軍の中佐として独立戦争に参加し、ジャカルタ付近で戦死したが、これは後の話だった。この吉住の夫人がハジ小林の妹だった。小林哲夫は私と同年、大正元年の生れだった。日大の学生時代に二・二六事件に連坐した。学生であったということと「マレー

の虎」山下奉文大将（当時少将）に知遇^{ちぐう}を得ていたことで、彼は助けられた。

その代りに日本に置いておいてはいかん、という山下少将の命令でトルコに連れてゆかれ、在トルコの陸軍武官府づきにされた。

すでに太平洋戦争の予感をもっていた山下將軍は、そのときの用意にと小林に回教教育を施そうと考えた。

トルコからカイロへ。小林は齋藤音次総領事にあずけられ、イスラム教最高の学府であるアズハル大学に入学させられた。ここで彼は四年間をみっちりと学んだ。日本人としてアズハル大学を卒業したのは彼をもって嚆矢^{こうし}とする。

アズハル大学を卒業した彼は、メッカへ巡礼してハジウマル・ファイサルの位を得て帰国した。こうしたいきさつからすれば彼は当然、参謀本部へひっ張られるはずであったが、まだ陸海が仲よく協調し

ていた頃だったので、海軍にもらわれて軍令部づきになった。海軍としては回教を通じてインドネシアの懷柔^{かいじゅう}を考えたのだった。

小林、吉住、近藤の三名はインドネシア独立と大東亜戦争完遂に死力をつくすことを固く誓って日本出発前に義兄弟の盃を交わした。私は吉住については知らないが、近藤はたしか小林よりも三つぐらい年下だった。

小林と近藤とが出発する少し前に久保辰二は、マカッサルでマレー字紙を出すために大洋丸で出発した。だが、大洋丸は途中で撃沈されて、久保は戦死してしまった。

こうなつては、是が非でも近藤が現地新聞の発行に当らねばならなかった。

海軍では小林とその一派には宗教（回教）を通じて、近藤には新聞を通じて、そして吉住とその一派には、裏面の情報活動を通じてインドネシア人の宜撫^{せんぶ}

と戦争協力とを計ったのであった。

だが、海軍と近藤たちとの意見には多少の（とは
いっても、後には大きな問題となってくるのであつ
たが）ギャップがあつた。

軍として求めるものはインドネシア人の全面的な
戦争協力であつた。インドネシアの独立はそのあと
で考えるべき問題だつた。ところが、近藤や小林たち
には、インドネシア独立と日本の戦争遂行に対する
協力とは、同じほどの比重をもっていた。独立を与
えるからこそ、協力が得られるのだ。そう考えた。

私と近藤とは、彼の義兄弟であるハジ小林の言
葉もあつたためだろうが、急速に親しくなってい
った。

はじめの頃、近藤もまた一人の新聞人として報道
班の連中と交わるためにわれわれの宿舎を訪ねてい
たらしいが、後には私だけを目標に遊びにやってく
るようになった。

珊瑚海さんごかいの海戦やミッドウェー海戦のニュースは伝
わつて来たが、まだセレベスやジャワはのんびりし
たもので、戦勝気分は軍民いずれの頭にも霞かすみのごと
くたなびいていた。

近藤がマレー字新聞を発行するために派遣されて
きていることは、われわれはみんな知っていたし、
彼がジャワに在った武官府の前田精少将ただしから絶大な
応援を得ていることもわかつていた。

彼の仕事はまだ緒しよについていなかったが、現地の
軍官民は挙げて彼の尻押しをしていたから、近藤の
意気も軒昂けんきやうたるものがあつた。

南十字星の輝く海岸の砂浜で、椰子やししげる酒店
で、或は女臭い慰安所で、私たちは安酒あさけを呷りなが
ら、日本やインドネシアの将来について、大いに論
じ合ったものだった。

現地における新聞発行の既成事実をつくりあげようと、パラオから南洋新報社の一行がマカッサルに乗り込んできたとき、私は近藤とセレベス島の中央部を旅行していた。

その頃はセレベス島の残敵掃討も殆ど終りを告げて、軍政は一応の成功を見せていた。だが、そのことは私たち報道班員にとっては、仕事がないというのに等しかった。

近藤が新聞発行のための下調査に中部セレベス山岳地帯に旅行にでかけると聞くと、無聊に苦しんでいた私は同行を申し出たのだ。新聞を読める者がどれくらいいるか、新聞を発行した場合どれくらいの影響力を与えうるか、というのが彼の調査の表面上の理由だった。親しくしているとはいえ、まだ彼は全面的には私を許していなかった。だから、この調査が、新聞を通じて、将来どれくらい独立運動に勢力が張れるかを調査するのだということは、おくび

にも出さなかった。私と近藤とは、彼がつれてきた二人のインドネシア人と共に、パレパレからマムジュ、エンレカン、トラジャ、マカレ、マリリ、ピンラン、さらに奥地へと旅をした。

明るくて近代的なマカッサルの街から一步離れて田舎に入ってゆくと、ジャングルは鬱蒼と繁り、交通も不便だった。私たちはかなり山奥まで入って、多くの酋長に会った。男女青年団員や、小学校教員などを集めて座談会を開き、彼らが日本に望む真意や、新聞に対する希望、風俗人情、ものの考え方、時局に対する認識といったことを克明に調査した。

近藤はそういった部落部落の男女青年層の中から将来ものの役に立ちそうな闘争的若者をマークすることを忘れなかった。彼の手帳はそうした連中の氏名で埋っていった。一度私は彼に、

「将来、通信員にでもするつもりかね」

とのん気な質問をした。すると彼は眼をきらっと光

らせて、

「まあ、それに似たようなことだ」

と苦笑した。中央の山岳部に入ると治安が悪くなった。というのは山に逃げこんだ蘭濠兵が、まだかなりいてゲリラをやっている、ということだった。もし、日本に協力したら彼らが報復にやってくると、住民たちは固く信じ、われわれに対してめいわくそうに反抗の気配さえみせた。

近藤は朝と夕方、宿舎の庭に出てバンバンと拳銃の射撃をやった。それは、われわれに武器があるということを示したものであった。事実、それがなかったら、あるいは襲われるような事態になっていたかもしれない。

ある部落では酋長に招待されて食卓についた時に酋長の息子が凄^{すこ}い眠つきをして、

「四百人や、五百人しかいないセレベスの日本人なんか殺すのはわけのないことだ」

と豪語した。それを聞くと、近藤はいきなり立ち上って、皆の見ている前で息子の横っ面を殴りつけた。

「そんならなぜ殺さない。四百人五百人どころか、ここには日本人はわれわれ二人しかない。すぐに殺したらどうだ。これで射ってみろ！」

彼は腰の拳銃を外して、息子の前に置いた。私がかあつと体が火照^{はて}った。その場に居合せた部落の主だった者も、言葉もなく凍りついたようになった。近藤の激しい気合に吞まれて、息子はがたがた震えだした。

またある部落では、酋長が村の娘たちを整列させて、どれでもよいのを選んで宿舎に連れてゆけといった。その時も近藤は、同じように激しい口調でいった。

「われわれは女さがしに来たのではない。オランダの時代は知らんが日本人はそんなことはしない。君